

WIAS Discussion Paper No.2019-004

隱元禪師年譜研究
A Study on Yin Yuan's Chronicle

December 2, 2019

林雪云
LIN Xueyun
福建師範大学
Fujian Normal University



1-6-1 Nishiwaseda, Shinjuku-ku, Tokyo 169-8050, Japan

Tel: 03-5286-2460 ; Fax: 03-5286-2470

隠元禪師年譜研究

A Study on Yin Yuan's Chronicle

林雪云¹

序論

隠元禪師には四十数冊の著作がある。これらの著作は主に日本に所蔵されている。隠元は日本に渡って明清文化を伝え、中日文化交流の促進に大きな貢献をしたことが知られている。にもかかわらず、これまで中国において隠元禪師の詳細な年譜は作成されてこなかった。そうした状況に鑑み、筆者は隠元の年譜を整理し、その思想体系を全面的かつ客観的に明らかにして行きたいと考えている。

1、隠元について

隠元隆琦(1592-1673)は福建省福清市の人で、明末清初の著名な高僧、詩人、書画家であり、日中文化交流の使者、日本黄檗宗の開祖である。天保十四年(1844年)、黄檗宗寺院は全国で956か所があった。幕府が統括した67カ国のうち、黄檗宗は51カ国に亘って分布していた。このように、幕府の宗教統制政策の影響を受けながらも、黄檗宗は驚くべき発展を遂げた。『黄檗東渡僧宝伝』によると、1620年から1723年までの百数年間に明清の僧が度々日本へ渡り、その数は78名にのぼったとされる。彼らのうち、隠元隆琦を含む3人だけが日本の皇室から国師として尊ばれ、封号を賜った。実際に、隠元隆琦は1673年から1917年の間に、6回にわたり皇室から号を賜っており、そのことは、弘法の功績の偉大さと影響を明確に示している。

2、各種の隠元年譜

隠元禪師には四十数冊の著作がある。冒頭で指摘したように、これらの著作は主に日本に所蔵されている。中国においては隠元禪師の詳しい年譜は存在しない。隠元は日本に渡って、明清の文化を伝播するなかで多くの困難と障害に直面した。隠元の年譜を整理し、その分析と編集を通じて、彼の人生の軌跡および思想体系を包括的に把握する必要がある。特に、63歳の隠元が日本に渡った後、どのように異国の地で伝道し、驚異的な業績を挙げたのか注目する必要がある。隠元に関する近年の研究成果の多くは、隠元の事跡の考証、日本に長期滞在することになった背景、詩偈作品ならびに黄檗の伝播の影響などに集中しているが、書道、篆刻、医学、煎茶などの分野も研究の課題とすべきであろう。また、隠元その人に関する研究は多くの場合彼の生涯からの推測に依拠するが、史料制約により、どうしても手落ちになる。従って、隠元の年譜を整理・編制することは、隠元研究にとって必要不可欠な作業なのである。

隠元の伝記資料の数あるヴァージョンのなかで、これまで最も注目されてきたものと

¹ 本稿の作成に当たって、石見清裕先生の指導を仰いだ。ここに記して感謝申し上げたい。

して、清順治十年(1653)に隠元の弟子、性宗によって編纂された『隠元禅師語録』収録の「行実」、隠元の従者、独耀性日が編集した『黄檗隠元禅師年譜』や隠元の法嗣南源性派が編纂した『普照国師年譜』がある。そこで以下本稿は、研究者の便宜に資するため、『隠元禅師語録』の冒頭の内容を参照しつつ、隠元の年譜の主要なヴァージョンを整理・翻訳し、さらに最新の年譜を追加することとしたい。

2.1 『行実』(中国語版)

『行実』は、隠元が福建省福州の福清黄檗山万福寺で60歳の誕生日を迎えた際、弟子の慧門如沛、木庵性滔、虚白性願、即非如一、常熙興焰らの要請を受け、隠元本人が口述した内容をもとに弟子たちによって記述・編集されたものである。『行実』編纂に当たって、弟子たちの念頭には、一般の人々にも隠元の禅宗思想を聞く機会を提供せんとする思惑があった。『行実』は、隠元の出生から清順治八年(慶安四年/1651年)11月4日に至る60年の行跡を記したものである。『行実』は1653年に隠元の弟子である性宗が編纂した『隠元禅師語録』に収録されているが、隠元が福清黄檗寺に在籍していた時分には出版されなかった。日本に渡ってから1年後の1655年(明暦元年)、『黄檗和尚全録』と題して出版された。また、隠元の入寂後に出版された『普照国師広録』(三十巻)にも『行実』が収録されている。

2.2 『黄檗隠元禅師年譜』(逸然本、中国語版)

1654年刊行の『黄檗隠元禅師年譜』(逸然本)(一卷本、中国語版)は、独耀性日が『行実』、『隠元語録』、『黄檗山志』などの内容を参照して編集したものである。『行実』のように、隠元が中国にいた時には出版されなかったものの、清順治十一年(承応三年/1654年)に隠元が日本に渡って以来、長崎は興福寺の僧侶、逸然性融の手によって初めて出版された。この年譜には「天運甲午歳孟冬上浣之吉 長崎興福寺監院逸然子性融捐刊流通」というくだりがあるが、他方で、巻頭に付記されている獨往性幽の『年譜乞言小引』においては、執筆時期が甲午孟春(清順治十一年/承応三年正月)とされており、執筆時期の記述に相違が見られる。しかし、年譜の原文は明らかに清順治十一年(承応三年1654年)10月まで、即ち隠元63歳で日本に渡って、その後1654年10月までの出来事も記されている。ちなみに、この年譜は、『支那撰述黄檗和尚年譜』や『隠元禅師年譜』、『黄檗和尚年譜』とも呼ばれている。

2.3 『黄檗隠元禅師年譜』(増逸然本、中国語版)

『黄檗隠元禅師年譜』増逸然本の表紙には『支那撰述黄檗和尚年譜』と書かれ、1頁目には宝福寺の蔵書印が押されていた。これは逸然本に基づき、清順治十一年(明暦元年/1655年)11月、すなわち隠元64歳までの事跡を追補したものである。

2.4 『黄檗隠元禅師年譜』(又増逸然本、中国語版)

『黄檗隠元禅師年譜』(又増逸然本)は、増逸然本をもとにして、句読点、送り仮名、および隠元 64 歳、清順治十一年(明暦元年/1655 年)12 月までの内容を追補してある。

2.5 『黄檗開山普照国師年譜』(上下巻、中国語版)

南源性派の『黄檗開山普照国師年譜』(二巻本、中国語版)は、『隠元和尚年譜』、『普照国師年譜』、『隠元和尚年譜』、『普照国師年譜』とも呼ばれる。これは、63 歳から 82 歳に至る隠元の事跡を追記したものである。本年譜は上下巻に分かれ、上巻は南源性派が『黄檗隠元禅師年譜』に若干の修正を加えたものである。清順治十年(承応二年/1653 年)、隠元 62 歳までの事跡を記す。下巻は南源性派が高泉性激の助けを得て新たに編纂したものである、清順治十一年(承応三年/1654 年)、隠元 63 歳から清康熙十二年(寛文十三年/1673 年)4 月、隠元が 82 歳で入寂するまでのものである。このように、本年譜は隠元の生涯の年譜である。しかし、出版者は不明であり、発行年、発行者などの記載もなく、研究者が利用するには不便である。本年譜に関してもう一つ注目すべき点として、『黄檗隠元禅師年譜』(一卷本)と『黄檗開山普照国師年譜』(二巻本)の記事が食い違っていることがある。したがって、双方を校訂することによって、事実関係を確認することが必須である。

2.6 『塔銘』(中国版)

『塔銘』は、明の崇禎十六年(1643 年)の進士の杜立德が南源性派からの依頼を受けて編纂したものである。その塔碑は宝元六年(1709 年)4 月、宇治万福寺第 7 代住職悦山道宗と 8 代住職悦峰道章によって黄檗山に建立された。しかし、江戸時代の哲学者にして儒学者の荻生徂徠はこの塔銘を長崎人の贋作と考え、その内容が石に刻まれるという報せ聞き、以前から親交のあった悦峰道章に書簡を送った(『徂徠集』巻二十九の『書翰』与悦峰和尚より)。塔銘は贋作とされているが、隠元の一生涯の事跡を簡潔に概説しているため、後に刊行された。

2.7 『黄檗開山隠元老和尚末後事実』(中国語版)

『黄檗開山隠元老和尚末後事実』は、その題が示す通り、隠元円寂後の諸事が記載されている。撰者は、隠元の法嗣木庵の後に、万福寺第 3 代住職になった慧林性機である。編纂時期は 1673 年(清康熙十二年/寛文十三年)4 月 8 日、すなわち隠元が入寂してから 5 日目のことである。

2.8 『隠元禅師年譜』(日本語版)

1999 年に禅文化研究所から、能仁晃道の編纂によって刊行された『隠元禅師年譜』は大変優れた年譜である。まず、この年譜は、現代日本語で隠元の生涯を 7 つの段階に

分けて詳細に紹介する。さらに、『黄檗隠元禪師年譜』（一巻本中国語版）と『黄檗開山国師年譜』（二巻本中国語版）の全内容が導入されている点も注目に値する。すなわち、2種類存在する年譜の全内容が年代ごとに並列表記されるのみならず、内容ごとに対応するかたちで訓読表記がなされているため、双方の記載内容の差を一目瞭然で見てとることができる。この年譜の後には、能仁晃道が編纂した『隠元禪師略年譜』のほか、『塔銘』、『行実』や『黄檗開山隠元和尚末後事實』も添付されている。『塔銘』を除き、本年譜は、影印本『新纂校訂 隠元全集』（1979年）を底本として、そのすべての内容を参照しつつ、それに加えて南源性派の『黄檗開山隠元老和尚末後事實』の巻頭付録の内容をも引用している。史料原文に出てくる古体漢字は、筆者が訓読した際に常用漢字に改め、さらに平章久保の『隠元全集』を参照しながら、隠元語録と照らし合わせつつ、各年次の記述を整理し、注釈を加えたものとなっている。こうしたことから、この年譜は、日本の研究者にとって大変便利である。

2.9 『隠元禪師年譜』（現代日本語版）

『隠元禪師年譜』（現代日本語版）は、木村得玄の編纂により、2002年9月に刊行された。この年譜は、南源性派の『黄檗開山国師年譜』（二巻本中国語版）を日本語に翻訳したものである。それは、まず、隠元禪師の生涯を年代順に分かりやすい現代日本語に翻訳したうえで、原文訓読を付した年譜を付したものである。ちなみに、本書の末尾には『隠元略傳』と『隠元系譜』が付録として収載されている。この年譜の体系と能仁晃道の『隠元禪師年譜』の体系には共通点があるので、日本人研究者による『黄檗開山国師年譜』のより包括的な利用に資する側面は大きい。さらに、能仁晃道の『隠元禪師年譜』との比較研究をおこなう上でも、この年譜は便利である。

2.10 『隠元年譜』 摘録

陳智超、韋祖輝、何齡修らによる編纂のもと、1995年3月に、中華全国図書館文献縮微複製センターから刊行された、『在日本高僧隠元中土往来書簡集』の文末には、『隠元年譜』摘録が付されており、隠元の一生の行実を簡潔に記録されている。

また、黄檗宗・慧日山永明寺のウェブサイトには、黄檗宗叢書の目録として月潭道澄が編纂した『国師年譜』が掲載されている。しかしながら、筆者が調べた限りにおいて、日本国内の図書館において本年譜の所蔵を発見するには至っていない。

結語

隠元禪師の訪日は、地域を超えた大きな出来事であった。隠元は明末清初という特殊な時代に、国家、社会、箇人の様々な要因を背景に、弘法を目的として日本に渡った。そして、彼は、臨済宗黄檗派を創立し、独特な「黄檗文化」を築いた。また、彼は身分のみならず、その人格や徳行においても庶民とは大いに異なっていた。彼は中日仏教文

化交流のために不滅の貢献をした。

隠元は異国に居ながらも、故郷を忘れることはなかった。すなわち、「万福寺」の旧寺名に沿って新しい寺院を建立した際、その管理制度、服装、日常の行事のすべてにおいて祖庭の旧制を踏襲し、僧侶の読経にも中国語を用いた。このような弘教方式が、日本という民族性の強い国で実施され、かつ、それが普及したことは極めて意義深いものと思われる。隠元の研究は今後も深化を遂げてゆくだらう。そのなかで、中日双方の文献資料の参照に基づいて、現存する各版『隠元年譜』を簡潔に整理することを通して、より広範な研究者および一般読者が全面的かつ詳細に譜主の行実を把握することが可能になるだろう。筆者の今後の課題として、隠元禅師の独特な価値を分析し、それが後世にどう影響したかを探求してゆきたいと考えている。

「附帯資料」

隠元禅師略年譜

明萬曆二十年/文祿元年（1592），一歲

十一月四日戌時，出生於福建省福州福清萬安想靈得裏東林。父親林德龍，母龔氏。兄弟三人，師排行次序最小。

明萬曆二十五年/慶長二年（1597），六歲

父親德龍去湖南湖北後，杳無音信。雖家業淡素，與兄長同受甘苦，常自怡然。

明萬曆二十八年/慶長五年（1600），九歲

在鄉學就學，順朱作對，具有夙根，與諸孩童有所不同。

明萬曆二十九年/慶長六年（1601），十歲

是年冬，廢學、漸習耕樵為業。

明萬曆三十五年/慶長十二年（1607），十六歲

常感天地宇宙、星河流轉非仙佛難明，遂起慕佛之念，從此無心於世，存超然物表之誌。

明萬曆三十七年/慶長十四年（1609），十八歲

時徑江有念佛會，師首次在此居留，每逢僧必咨出世之要。

明萬曆三十九年/慶長十六年（1611），二十歲

母與長兄欲為定聘，師以男兒生世親恩為重，今父出未歸不知所處為由，不談嫁娶之事，母不奪其誌許之。

明萬曆四十年/慶長十七年（1612），二十一歲

禪師誌切尋父，謀於母將聘金為路費，直抵豫章（今江西南昌）至金陵（今江蘇南京）。遇母舅龔泉宇勸諭其還家，師不聽，復往寧波舟山見族叔，叔亦勸歸，師以未得面父弗從。

明萬曆四十一年/慶長十八年（1613），二十二歲

有方先生者善畫，師與之有舊，同遊一載，凡紹興各縣名勝俱歷盡焉。

明萬曆四十二年/慶長十九年（1614），二十三歲

是春，隨進香舟至南海普陀山，朝禮觀音。認為菩薩神力必能助其尋父，及到山忽見佛境殊勝，大非人世，遂發心持素，至潮音洞擔當茶頭執事，日供萬眾，不以為勞。

明萬曆四十三年/元和元年（1615），二十四歲

隱元禪師寓普陀。三月，附香船歸閩省母，回到闊別四年之久故鄉，並勸母持齋信佛。

明萬曆四十四年/元和元年（1616），二十五歲

欲再往普陀出家。母不許，以其年事已高，待其百歲後出家未遲，遂聽母言，居家清修。見生命之物必贖放之。不逾年，家資殆盡。

明萬曆四十五年/元和三年（1617），二十六歲

誌決出家，別母徑往普陀。路至福寧州，行囊路費被盜一空。不得已復回家。母雲早聽吾言不至是也，仍耕樵供母。

明萬曆四十六/元和四年（1618），二十七歲

常慮出家緣弗就，一日登石竹山九仙觀祈夢，夢有深山巖崖中，有二僧坐巖石上食西瓜，剖而為四，見師來欣然以一分與之，師食畢遂寤。竊自喜曰，四沙門果吾預其一，吾事濟矣。

明萬曆四十七年/元和五年（1619），二十八歲

是年母終。請黃檗大德禮懺修薦，會鑒源壽公於印林寺。公知師有出家南海之誌，因委曲引諭曰：人之學道何必擇地？因緣在處即是道場。師曰：恐檗山近俗，嫌疑未便。公曰：人俗心不俗可耳。師然之。

明泰昌元年/元和六年（1620），二十九歲

二月十九日，師至黃檗，禮鑒源興壽禪師剃度出家。或者嘲曰，東林亦有佛耶？師應之曰：曾聞，佛性遍周沙界，豈獨外東林？昔廬山東林有慧遠，焉知今日東林無元公？於是師發願，必精修梵行，興崇法門。自是常持疏，走民間募資。冬聞道亨法師講《楞嚴經》於海口瑞峰寺，特往聽之。

明天啟元年/元和七年（1621），三十歲

時黃檗道場荒圯，師誌在興修。乃領疏之燕京（今北京）募化。至杭州聞京都有警，暫住紹興雲門山顯聖寺，參湛然和尚，聽《涅槃經》。是時，始聞本師費和尚之名，心竊慕之。六月，時仁禪師京回抵杭，得見，談及京中多故，緣事不就。因問時仁禪師，依經釋義三世佛冤，離經一字如同魔說，如何消釋。仁雲，三十年後向汝道。師意憤然，以為欺人太甚。遂不回山，遍參諸方。

明天啟二年/元和八年（1622），三十一歲

是春，至嘉興興善寺聽《法華經》。期滿，關主玄微留為檀越誦《金光明經》，經畢告行主雲、經資未至，且伺幾日。師雲、衲僧家要行便行、豈為些利所系，遂行。主嘆服。

明天啟三年/元和九年（1623），三十二歲

至浙江省碧雲寺，聽《楞嚴經》。聞天臺通玄寺有密雲和尚（費隱通容之師），欲往參謁。

明天啟四年/寬永元年（1624），三十三歲

是春，同慈然禪友往海監，於積善庵過夏。五月初，正欲理策上天臺。忽聞密雲和尚來金粟山宏慧寺，喜不自勝。遂造金粟，參見密雲老和尚，並得其開示。

明天啟五年/寬永二年（1625），三十四歲

於金粟山，日夜修行。

明天啟六年/寬永三年（1626），三十五歲

是年，於金粟山，得密雲元悟之繼承人五峰如學的啟發，大悟法之源底。

明天啟七年/寬永四年（1627），三十六歲

師在金粟尚未知名。一日續知禪師商議與諸同參結頌古社，三日一次。師頌三十則，密和尚即點出二十七則，大眾嘆服，始知有隱元。

明崇禎元年/寬永五年（1628），三十七歲

寄書信與徑江林護法、述撤法經歷。時金粟開戒期，師被禮請為尊證阿闍黎。

明崇禎二年/寬永六年（1629），三十八歲

春，離開金粟山，辭密雲禪師。到嘉興府嘉善縣狄秋菴過夏。庵傍有錢相國書院，公子等日來問道。師示以捷徑，又與戒徒檀信等，作念佛放生會。八月，福清黃檗耆宿，同護法居士到金粟，請密雲禪師開法，密雲禪師念黃檗乃希運祖庭，遂許。有書相招，師仍回金粟。

明崇禎三年/寬永七年（1630），三十九歲

三月二十七日，從密雲和尚應黃檗請，回離別十年之久古黃檗。未幾密雲和尚命師領疏南行募化。五月，至漳州、見大司憲東裏王公，道密和尚入院詳細。七月、之潮州、寓草菴。時師衣單蕭索，庵主疑非黃檗化士，緣事弗就。因訪樵雲公於芝山，贈以偈。及回山、則密和尚已於八月歸浙。

明崇禎四年/寬永八年（1631），四十歲

是年，龔夔友、夏象晉二居士，請住福清獅子巖。剃度性常、性樂、性善等，刀耕火種、並力合作、種薯蔬為食。人所難堪，師怡然自得。

明崇禎五年/寬永九年（1632），四十一歲

居獅子巖絕頂、萬仞壁立。

明崇禎六年/寬永十年（1633），四十二歲

十月十五日，費隱通容和尚主席黃檗，推師為西堂。

明崇禎七年/寬永十一年（1634），四十三歲

一月，於黃檗學法於費隱通容。二月回獅子巖。秋，在獅子巖建遼天居，冬移居其內。

明崇禎八年/寬永十二年（1635），四十四歲

巖居孤峻峰，迴絕塵喧。

明崇禎九年/寬永十三年（1636），四十五歲

住山頗久，四方仰重。夏，本山耆舊及鰲江檀信等，再三請師繼黃檗法席。通費和尚差人送去法脈源流、法衣，以表法信。

明崇禎十年/寬永十四年（1637），四十六歲

是夏五月，黃檗耆宿同侍禦心，弘林公等請隱元師接席當山。遂於十月初一日入院，即日開堂。拈香以酬法乳，時密和尚據天童、費和尚董法通、隱元禪師主黃檗，三代同時唱道。稱法門盛事。臘月於熨鬥山臥雲菴種松樹萬株，改額為萬松。

明崇禎十一年/寬永十五年（1638），四十七歲

冬修中天祖塔，並建庵以奉香火，扁曰梅福。

明崇禎十二年/寬永十六年（1639），四十八歲

春，著手興建黃檗殿宇，送諸化土上堂，親題請藏賜紫中天正園、鑿源興壽、鏡源興慈三祖師像贊。

明崇禎十三年/寬永十七年（1640），四十九歲

正月初八，建大雄寶殿，上梁升座。題天童密雲、金粟費隱和尚像贊。臘八為嚴居士落發剃度，法名天柱號性空。

明崇禎十四年/寬永十八年（1641），五十歲

正月解制，閱藏圓滿。二月之溫陵羅山，訪法弟互和尚，敘同門之誼。題羅山十四景，參禮曹山、開元、延福、平山諸刹，夏回黃檗山。造費隱容老和尚壽塔，復造報恩塔葬母龔氏，及眾父母立石為記。冬建鐘樓於藏閣之右，鑄千斤銅鐘，以備禪林禮樂。

明崇禎十五年/寬永十九年（1642），五十一歲

七月初，密雲老和尚示寂於天臺通玄寺，師設位展哀。是後凡遇諱辰，必竭誠獻供。示不忘法之源委也。冬，大殿佛像裝塑畢，開光上堂。刻黃檗語錄二冊，晉昌大中丞唐世濟、及山陰孝廉王谷為序。

明崇禎十六年/寬永二十年（1643），五十二歲

是年春，山門寮舍皆竣工，歷時七載。臘月互信和尚至。

明崇禎十七年（清順治元年）/正保元年（1644），五十三歲

春，至福清萬安福善堂，為中天正元立牌位。三月，把古黃檗法席傳給互信行彌，往金粟山省覲費隱通容和尚。五月往天童，掃密雲和尚塔。十月十七日成為嘉興府崇德縣福嚴寺的住持。

清順治二年/正保二年（1645），五十四歲

是年南北兵戈紛擾。二月回閩至福州東郊，掃瑞天祖塔。三月二日請住長樂龍泉寺。授法給玄生海珠、西嚴明光。

清順治三年/正保三年（1646），五十五歲

春，付法給慧門如沛。再住黃檗山。夏，授法給也嬾性圭。

清順治四年/正保四年（1647），五十六歲

春，付法良冶性樂。二月，鎮東、海口二城陷落。殺者數千人。六月往東嶽，建水陸普度法會兩月余。

清順治五年/慶安元年（1648），五十七歲

是年世界紛紜，師規警倍嚴，清淡自守。率眾挑柴於市，以給日用，見者無不敬慕，

山門得圖表以無虞。

清順治六年/慶安二年（1649），五十八歲

春，付法中柱行砥。制中天祖、萬安福善堂碑記，斂香燈五十金，置田黃檗。

清順治七年/慶安三年（1650），五十九歲

春，付法木菴性滔，示陳道人法語。秋，付法虛白性願，挽施雲翼方伯、林臯如（林化熙）博士詩。是年，構翠竹菴三楹於寺之左，以存舍衛之風雲。

清順治八年/慶安四年（1651），六十歲

春，囑即非如一，重修上善塔於桑池園之左。夏，鳳山也懶性圭長老應日本崇福寺請，舉為座元秉拂，未幾東渡，厄於水。是後，師應請赴日，實基於此。夏末為三山歐全甫剃度，法名性幽，字獨往。因其素有節操文名，命其修黃檗誌八卷。八月，莆中緇白，請遊仙邑九鯉湖。遍歷莆田諸刹。是年結冬，莆田緇素萬指圍繞，萬福寺遂分為兩堂，立慧門沛、木菴滔為座元，虛白願、即非一為西堂。是年，建獅子、水月二庵，近寺之鄰以存舊跡雲。

清順治九年/承應元年（1652），六十一歲

春，付法心盤真橋。秋，回獅巖舊隱。臘月八日開戒宣疏。至開戒於洪武十年，善述於成祖昭世。列聖恩深，今皇德重、一時感傷涕泣不能仰視。是年，為海寧姚興公薙染，法名性日、字獨耀，命掌記室。是年、門弟子等，以禪師臘逾六旬，各捐衣鉢資、為營壽塔。師以歲饑拒之。

清順治十年/承應二年（1653），六十二歲

是年，山海兵戈復起，民不遑居。未幾，日本興福住持逸然，奉王命差僧古石、賚書帛聘師東渡開化。先是數請未決，茲見其誠懇，特為上堂許之。冬，結制舉即非一座元秉拂。師自丁醜冬主席當山前後凡十七年，共置田四百余畝。時值歲艱，眾賴以安。山鄰每與寺為難者，禪師亦憫之，每給衣食以濟。

清順治十一年/承應三年（1654），六十三歲

上元日，兩序同眾護法，以師有東應之事，詣方丈哭留。師憫眾誠，為躊躇久之。但法語已出，欲踐其言，遂有決應之意。舉慧門沛座元繼席黃檗。五月初十日辭眾上堂。六月廿一日藩主鄭成功備舟護送，從廈門出航。七月初五晚抵長崎。次早寺主逸然同檀越請進興福寺。即日二鎮主謁見謙恭致禮，各贈以偈。歲暮大雪，島中耆老有三多之謠，謂多船多僧多瑞雪也。師因呼童堆雪彌勒一尊，賦詩三絕。數日瞻禮者如市。

清順治十二年 /日本明歷元年（1655），六十四歲

一月，古石性榮回國。差僧通書費隱通容和尚。二月建興福山門。五月廿三日入山崇福寺。七月，會竺印訪興福寺，高槻普門寺請師入住普門。七月九日，木庵性滔到長崎。八月九日，應普門請、辭眾上堂，是夜宿諫早，鍋島信濃太守命舟迎接渡江。十四日至豐州開善寺，留信宿，瞻禮者眾。九月初五至大阪江口，會高麗國朝貢至，觀者如堵。九月六日，普門寺入山。十月十二日，前京都所司代板倉重宗造謁。十一月四日，普門寺開堂。

清順治十三年/日本明歷二年（1656），六十五歲

建普門寺西來亭。四月，無上性尊、古黃檗門人、信徒等催歸書信寄到長崎，這信轉到普門寺。一日黃檗暨諸宰官書迎隱元禪師回山踐三年之約，由是有回邦意，會寺主從江府回懇留再四，姑許之。七月起蓋普門寺禪堂。寄拂子一枝，給常熙興焰。孟冬，應禿翁妙宏、竺印祖門之邀，遊京師仙壽、龍萃、妙心寺、南禪寺。冬立慧林機為西堂。

清順治十四年/日本明歷三年（1657），六十六歲

聞武江火變歸國之意遂止，因建千佛道場七日以薦火亡。四月，送龍溪性潛去江戶，向幕府傳達歸國之意。八月寺主江府回，陳上意且賜僧糧留師弘法，禪師不得已許之。先是七月若一禪人，賚徑山老和尚書至，崎主檢書中言切，恐動師念。祕至十月，聞禪師許留，始發出。隱元禪師讀之歉然，第以前言既出即復書慰候。

清順治十五年/日本萬治元年（1658），六十七歲

六月，黃檗住持慧門、費隱通容，復命使致書請隱元禪師回山，而徑山老和尚催簡亦至，禪師一一裁答。七月寺主龍溪性潛從江戶回，欲延禪師彼中行化，禪師力拒之，堅請至再，勉從其誠。九月初六從普門寺啟行。十八日至江戶，寓天澤寺。十一月一日，龍溪性潛、禿翁妙宏、通事一人陪同登城，拜謁德川家綱。十一月二十一日，幕府承賜衣金。廿八日離天澤。十二月十四日歸山普門寺。

清順治十六年 /日本萬治二年（1659），六十八歲

春，獨照性円請遊嵯峨直指庵。二月，山城澱城主永井尚政，備舟請遊宇治。訪興聖寺、平等院等。五月，收酒井忠勝信。六月，承上旨留附京開創，龍溪寺主請擇地。師復酒井忠勝信，決定滯留日本。九月，應大阪秋野信士請，遊天王寺。

清順治十七年/日本萬治三年（1660），六十九歲

四月二十九日，牧野親成、五味豐直、大工棟梁中井主水陪同，訪大和田。十月，木庵性滔到普門寺。十二月十六日，交付慧林性機、龍溪性潛大和田新寺地。十八日，定新寺名為黃檗山萬福寺。

清順治十八年/日本寬文元年（1661），七十歲

解制後，命西堂慧林機至江府謝賜地。三月二十九日，費隱通容遷化。八月廿九日黃檗山晉山。十一月四日，師七旬大誕。十一月十九日費老和尚訃至。

清康熙元年/日本寬文二年（1662），七十一歲

二月，建法堂，範道生雕造黃檗山諸像。七月十二日，酒井忠勝死去。留寄進黃金千兩遺言，建伽藍造寺地。廣十一間突十間，上梁日有偈。冬，近藤語石居士施黃金百顆，為建竹林精舍以存舍衛之風。

清康熙二年/日本寬文三年（1663），七十二歲

上元日承大將軍令旨，為國開堂祝聖。三月，尋蒙國主賜僧糧四百石，述偈致謝。五月，眾請登石山寺禮觀音，諸信士以舟接，琵琶湖中放生，有紀言。廿五日，太上法皇委龍溪公請隱元禪師示法要。八月廿三日禪堂上梁。是冬眾近五千指，立兩堂首座分攝。舉龍溪潛獨湛瑩為西堂。諸門弟子以隱元禪師臘高，為營壽藏於萬松岡，造法像於開山堂。建松隱堂於萬松岡下。十二月，開黃檗三壇戒會。禪堂、方丈、執事寮、侍者寮、行者寮

等完工。

清康熙三年/日本寬文四年（1664），七十三歲

春，付法龍溪性潛。五月，付法獨湛性瑩。本多野州太守為造本山八大阿羅漢，資母太夫人冥福請開光。夏，原田佐右衛門施白金三百兩，掘放生池。九月，退居松堂，辭眾上堂。即日命木菴滔座元繼席。

清康熙四年/日本寬文五年（1665），七十四歲

春，建通玄門並書額其上。示高野真政律師南源侍者偈。五月應法光院獨妙禪德請，為檀越遠忌拈香。次詣桂宮院禮佛舍利謁聖德太子遺像。接福唐黃檗書，知法屬等相繼告寂者四十余人。隱元禪師嗟嘆不已，設位致祭。九月，慧林性機請遊佛日寺。十月太上法皇飲師道化，降賜禦香兼金存問，禪師述偈進謝。復豐前源忠真大守書。

清康熙五年/日本寬文六年（1666），七十五歲

六月廿九日太上法皇，以佛舍利五顆貯以寶塔賜禪師。命眾備香花旛蓋迎置松堂。又賜金勅建舍利殿，禪師作記頌進謝。

清康熙六年/日本寬文七年（1667），七十六歲

春香林信士請遊奈良，首詣東大寺禮大像以至興福。春日二月堂眉間寺及西京西大招提藥師三古刹，各有紀言。春二月下浣有清信士作東道主，延予隨喜諸刹。四月長門太守，遣使入山祈嗣請法語。示鐵牛法孫偈。五月廿五日禪師晏坐丈室，尋報大將軍令旨到，發白金二萬兩及西域木等為本山建殿宇。六月十九日舍利殿告成，有拈香法語。

清康熙七年/日本寬文八年（1668），七十七歲

是年本山締構經始。三月廿五日大殿上梁。既而，天王殿應供堂鐘鼓樓等次第告竣。十月十五日，大雄寶殿、天王殿、齋堂落成。臘月八日興建畢，啟佛會者七日拈香祝國，有落成歌一章。

清康熙八年/日本寬文九年（1669），七十八歲

春豎大雄寶殿額。五月松平薩摩守立花飛彈守大村因旛守相繼造謁，各示以偈。為關梅巖居士題舍利贊。秋，鐵眼上座請刻藏經。十月一日，太上法皇以禦制佛舍利贊賜隱元禪師。十一月初六福唐黃檗新主，命虛白願公專使來謝法。使回寄祭先老和尚塔文，挽林月樵護法偈。

清康熙九年/日本寬文十年（1670），七十九歲

隱元禪師眼尚精明常閱萃巖，有五十三參總頌。夙夜聞鐘鳴，必起坐持心經，至老不怠。即非首座為禪師造發塔於崇福。贈作州太守森內記造謁偈，為圓光院梅檀像開光。秋，南源侍者建禪師影堂於萃藏。示松島洞水大德參謁偈。八月二十三日，龍溪性潛遷化。師祀父母牌位於松隱堂。

清康熙十年/日本寬文十一年（1671），八十歲

春付法獨照性円。中秋日付法南源性派。仲冬隱元禪師誕辰，嗣法門人暨四方碩德各以詩文為祝。禪師感其誠敬，述耆齡答鄉一卷。十二月八日，著《老人預囑語》、《開山塔院規約》。

清康熙十一年/日本寬文十二年（1672），八十一歲

春，天圭照周請遊東山泉湧寺，謁太廟過戒光寺禮梅檀瑞像。重陽日，作祭中天祖塔文，又作祭報恩塔文，付法獨吼性獅、為海福寺撰鐘銘題殿額。制黃檗鐘銘山門聯，書妙高峰等額。除夕，作辭年偈，禪師離世之意見矣！

清康熙十二年/日本寬文十三年（1673），八十二歲

元旦，付法獨本性源。二月三日，上皇降旨問法，禪師奏答稱旨，賜錦織大悲像副以禦香。二月十九日，禪師示微疾。廿二日為嗣法獨照圓題自贊。侍者梅谷題彌陀像。三月一日，作遺語並偈，寄福唐黃檗及諸護法勉其護念祖庭。三十日上皇遣使存問。四月朔日，禪師念行化此方，蒙大將軍賜地開山檀恩不淺，特書偈致謝。初二日上皇特賜“大光普照國師”之號。下午示月潭法孫偈。初三早刻禪師顯行期逼矣！至午刻起坐，眾請遺偈。禪師奮筆漫書“西來榔栗起雄風，幻出檗山不宰功。今日身心俱放下，頓超法界一真空。”書罷，適不二興石二居士來問候，隱元禪師舉目顧視已泊然長逝。實日本寬文癸醜四月初三日未時也。

参考文献：

- 1 木村得玄『隱元禪師年譜』（東京春秋社出版 二〇〇二刊）。
- 2 能仁晃道『隱元禪師年譜』（東京禪文化研究所 一九九九年刊）。
- 3 独耀性日『黃檗隱元禪師年譜』（日本長崎興福寺 一六五四刊）。
- 4 劉沢亮『黃檗禪哲学思想史研究』（武漢湖北人民出版社 一九九九年刊）。
- 5 平久保章編『新纂校訂隱元全集』（東京開明書院 一九七九年刊）。
- 6 加藤正敏，林雪光著『黃檗文化人名辭典』（東京思文閣 一九八八年刊）。
- 7 大隅和雄，速水侑『日本仏教史』（東京梓出版社 一九八一年刊）。
- 8 林觀潮。『隱元隆琦禪師』（厦門大學出版社 二〇一〇年刊）。
- 9 平久保章著『隱元』（東京吉川弘文館 一九六二年刊）。
- 10 木村得玄『江戸黃檗禪刹記』（東京春秋社出版 二〇〇九年刊）。
- 11 加藤正俊『百人の禪僧』（淡交社 一九八〇年刊）。
- 12 木村得玄『隱元禪師と黃檗文化』（春秋社 二〇一六年刊）。
- 13 鈴木大拙、陶剛訳『禪と日本文化』（北京生活・讀書・新知三連書店 一九八九年刊）。
- 14 林觀潮『臨濟宗黃檗派と日本黃檗宗』（中国富富出版社 二〇一三年刊）。
- 15 『黃檗山寺志』（福建地方志叢刊 一九八九年刊）。
- 16 陈智超『在日高僧隱元忠言往来无际』（中華全國圖書館文獻縮微複製中心 一九九五年刊）。
- 17 林觀潮『臨濟宗黃檗派と日本黃檗宗』（中国富富出版社 二〇一三年刊）。
- 18 木宮泰彦『日中文化交流史』（商務印書館 一九八〇年刊）。
- 19 劉沢亮『黃檗禪哲学思想史研究』（武漢湖北人民出版社 一九九九年刊）。